



物流企業による、WMS（倉庫管理システム）を活用すること。また、マテハンやロボット企業規模を問わず当たり前に活用をいまだ部分的なものととらえている現場が散見される。WMSの役割は「在庫管理」「業務の部分的なシステム化」「基幹システムとの連携」にはとどまらない。

今回は、WMSを導入する際、効果を最大限に得られるようにする基本的なポイントを紹介していく。

第4回でも説明したように、改善活動の効果に対する正しい評価は、主観的なものではなく定量的な指標で行う必要がある。現場の改善活動を進めるツールと

導入効果を最大化するポイント

WMS導入のポイント

【WMSの導入効果を最大化させるポイント】

- ① 周辺システムとの連携 → ・密な連携で業務を効率化
- ② 業務の標準化 → ・「ベテランなら」から「誰でも」へ
・パッケージ機能を最大限に利用
- ③ 新プロセスの有効性検証 → ・現場業務との整合
- ④ 新プロセスの定着化 → ・稼働後の定期的な確認体制まで構築

3つ目が「新プロセスの有効性検証」である。資金に余裕のない中小企業にとって、安価に導入できるメモリは大きい。導入する場合は、自社で使用する周辺の業務システムといかに連携・役割分担すべきか、社内外の関係者を巻き込んだ検討が必須となる。

2つ目は「業務の標準化」。特殊な出入庫作業や納品書の作成など通常作業と異なった作業が多い現場でWMSを導入する場合、それに対応した仕様にする必要があるため、費用が高くなってしまう。パッケージWMSは標準の機能そのままで使えない場合も多いが、標準機能に基づいて作業を荷主や納品先と共に見直し、再構築した上で標準化することが求められる。

「新プロセスの定着化」だ。WMSの導入も「業務改善」と考え方は同じ。運用方法も、海外製の安価な機器のメンテナンスはもちろん、メンテナンス（共用）といった投資額が少ないサービスの活用などを見据えて、新たなWMSの導入を検討すべき時代に来ている。

冒頭でも触れたがWMSは、省人化・自動化を図るが現場の動きと連動して機能しないなどの課題が浮き彫りになり、導入自体のやり直しという最悪の事態に陥り直している。この検証は、システムと連携させなければ得られない。

このようにWMSによる情報の整備は自動化の前提条件にもなる。自動化機器などへの投資には手が出せないと考えている企業で、海外製の安価な機器のメンテナンス（共用）といった投資額が少ないサービスの活用などを見据えて、新たなWMSの導入を検討すべき時代に来ている。

整合性がないと、WMSは、省人化・自動化を図るが現場の動きと連動して機能しないなどの課題が浮き彫りになり、導入自体のやり直しという最悪の事態に陥り直している。この検証は、システムと連携させなければ得られない。

省人化・自動化にも不可欠

1 際は注意が必要だ。資金に証だ。WMSの導入による抜いてはならない。

クニエ

ロジスティクスグループ

大室 翔史

